

2022年の内外石油情勢の展望と課題

一般財団法人日本エネルギー経済研究所

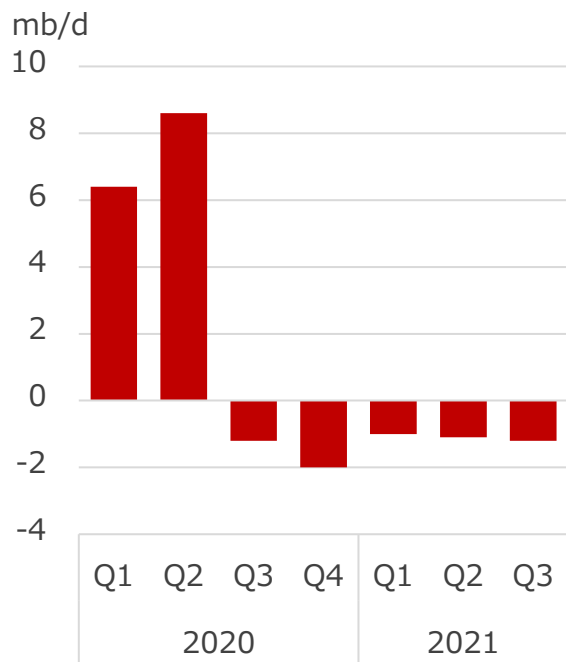
石油情報センター所長・研究理事

市原 秋男

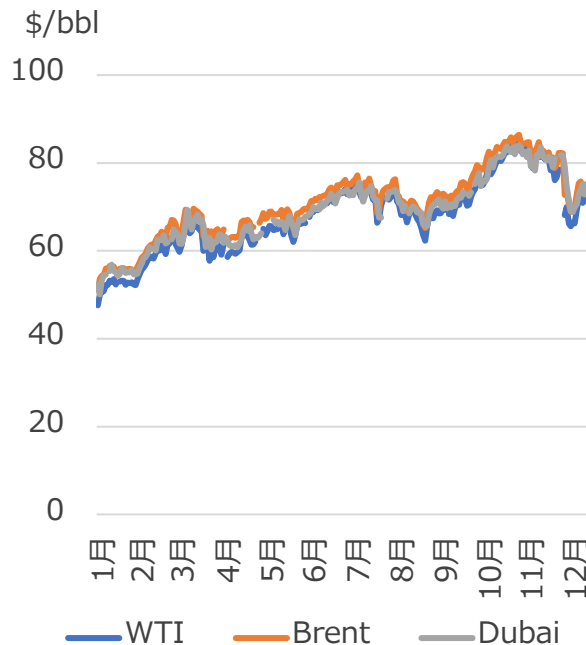
- ✓ コロナ禍からの経済回復に伴う原油需要の増加に対し、OPECプラスの減産及び米国の生産量伸び悩みから需給逼迫感が高まり、2021年は原油価格の上昇が続いた。油価の高止まりを背景に、米国や日本等は石油備蓄の放出を決定。他方、11月下旬にはオミクロン株感染拡大でパンデミック悪化の懸念が急速に高まり油価が大幅に下落した。OPECプラスは、12月初旬に現行の月40万b/dの増産を来年1月も継続することを決定。
- ✓ 2022年の世界の石油需要は、パンデミックが極端に悪化しないとの前提で2021年比430万b/d（4.4%）増の1億60万b/d、供給はOPECプラスが増産自体は維持するという前提で同510万b/d（5.4%）増の1億70万b/dと予測。
- ✓ 国際原油（Brent）価格は、2022年平均で\$70と予測。但し、COVIDパンデミック悪化、OPECプラス減産再開は大きな不確実性。前者の影響で石油需要低迷の場合は、基準予測より原油価格は平均値で10ドル下落。後者の影響で需給タイト化の場合は、同平均値で10ドル上昇と予測する。
- ✓ 脱炭素化の動きが一段と加速した状況下、石油業界にとっては、事業基盤の再構築と災害時や過疎地SSを含めた安定供給体制の維持の並行的対応が求められる。

2021年の原油市場

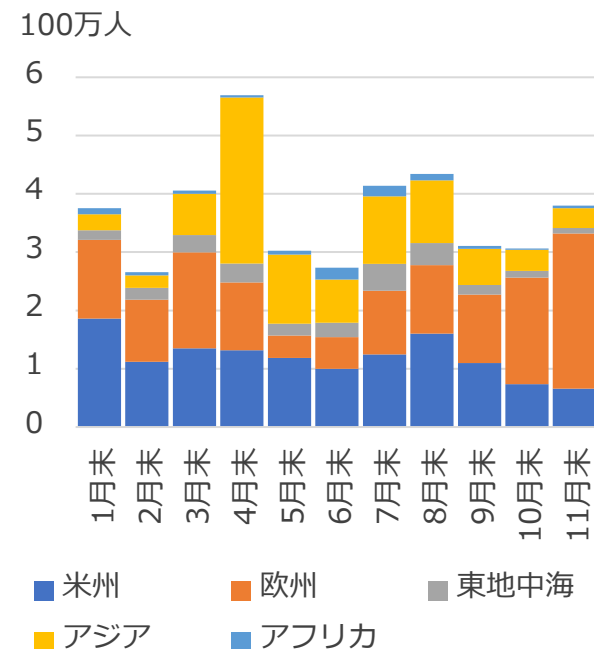
需給バランス



価格推移



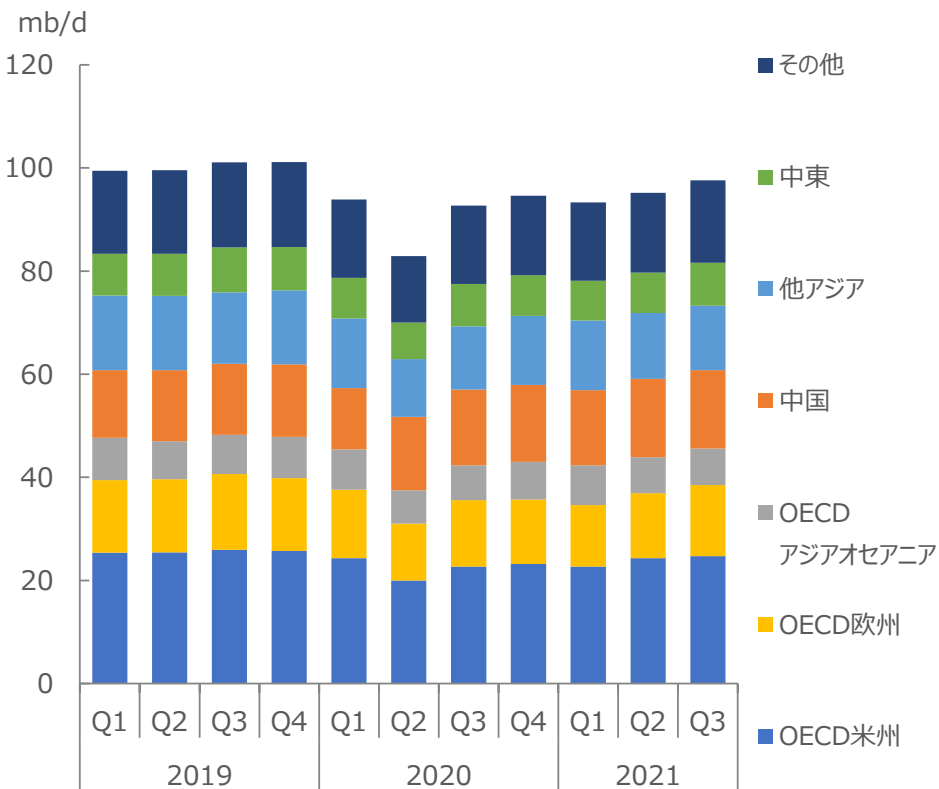
COVID-19新規感染者



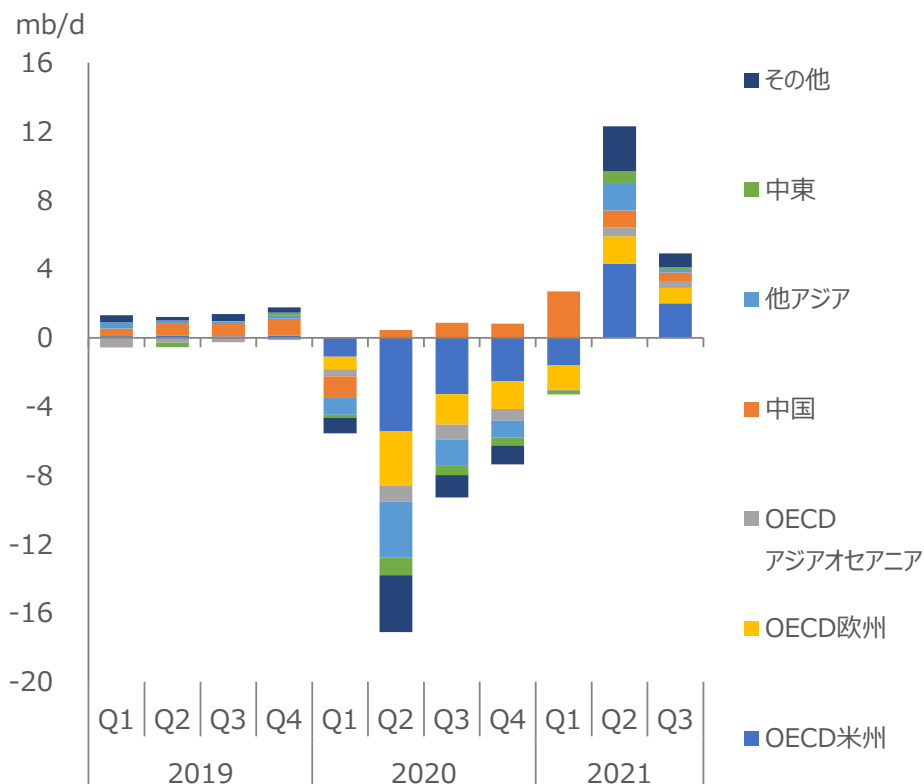
出所: IEA、CME、ICE、WHO

- 経済再開に伴う需要増、OPECプラス協調減産、米国生産量伸び悩みが影響し、需給が引き締まり、在庫減少・価格上昇に。
- 原油価格上昇は物価にも波及、マクロ経済回復の懸念材料に。
- 11月には石油価格高騰対応として米国主導で異例の備蓄放出を決定。
- パンデミックは収束できず、11月末にはオミクロン株感染拡大懸念で価格急落。
- OPECプラスは1月の増産維持を決定も、2022年に増産停止する見方も根強い。

需要



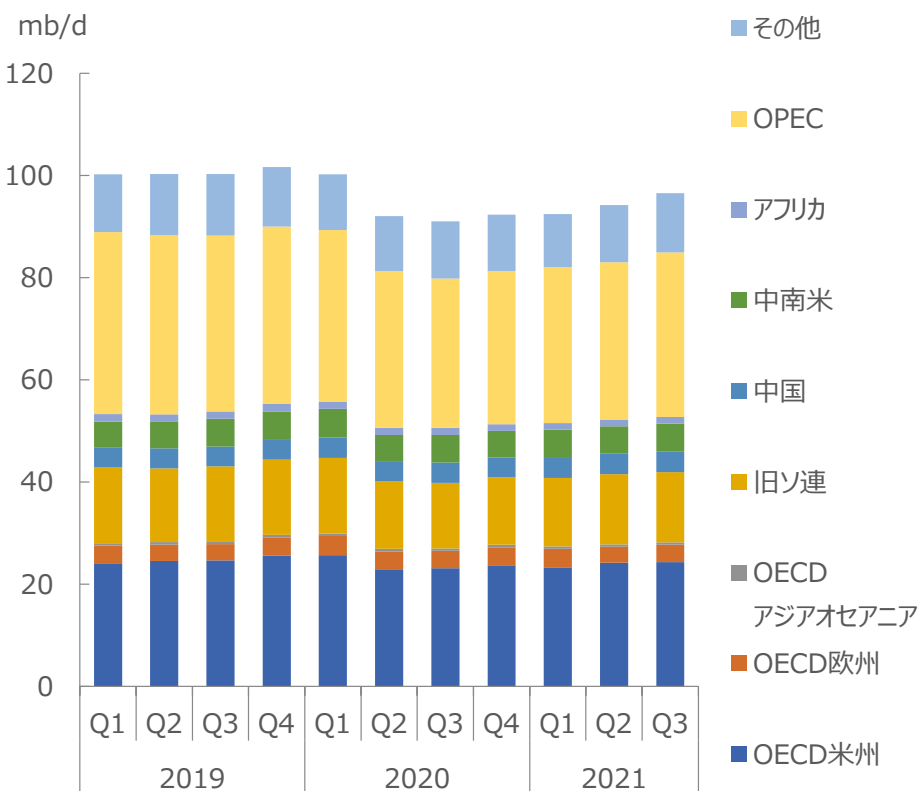
需要増減 (前年同期比)



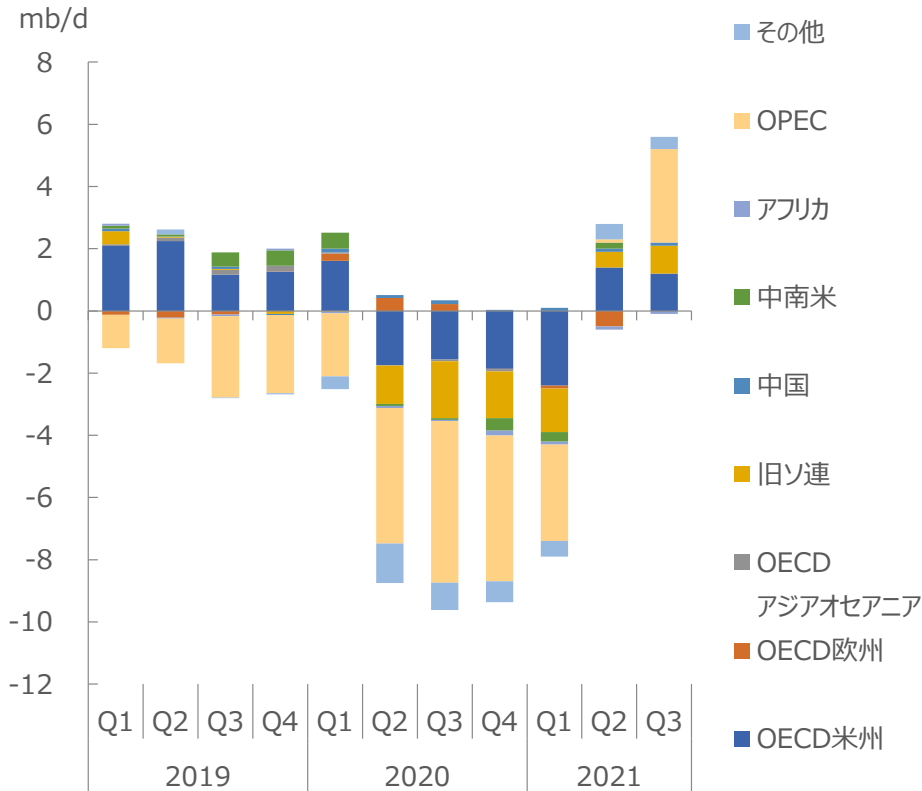
出所: IEA "Oil Market Report"

- 2021年第3四半期の需要は前年同期比550万b/d (6.0%) 増の9,760万b/d。COVID-19パンデミックは収束出来ていないが、経済再開に伴い需要回復が続いている。
- パンデミックが極端に悪化しないとの前提で、2022年は2021年比430万b/d (4.4%) 増の1億60万b/dと予測。

生産量



生産量増減（前年同期比）

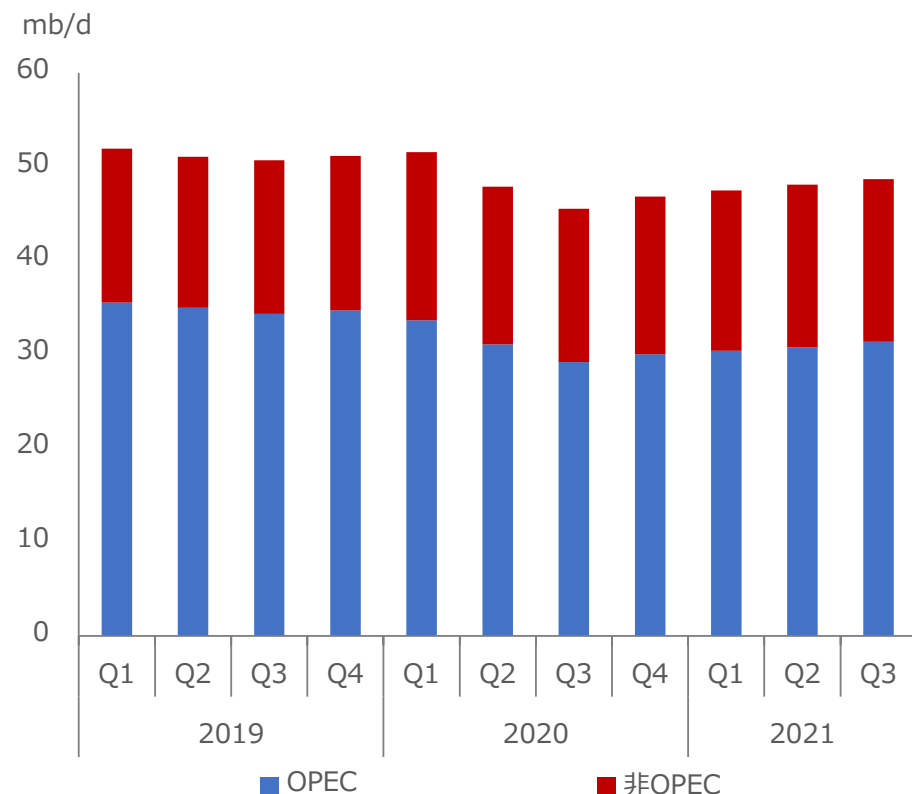


出所: IEA "Oil Market Report"

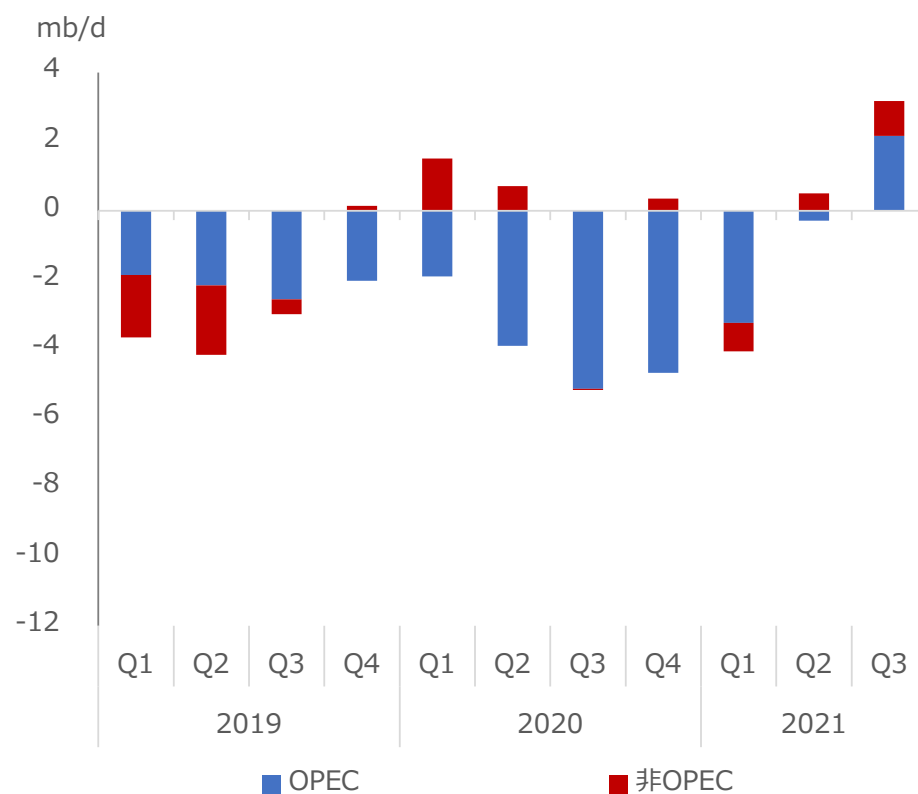
- 2021年第3四半期の生産量は前年同期比540万b/d（5.9%）増の9,640万b/d。
- OPEC増産及び米国生産量回復ペースは需要増加に追い付いていない。
- OPECプラスがペースは鈍化しつつも増産自体は維持するという前提で、2022年は前年比510万b/d（5.4%）増の1億70万b/dと想定。

OPECプラス協調減産

生産量



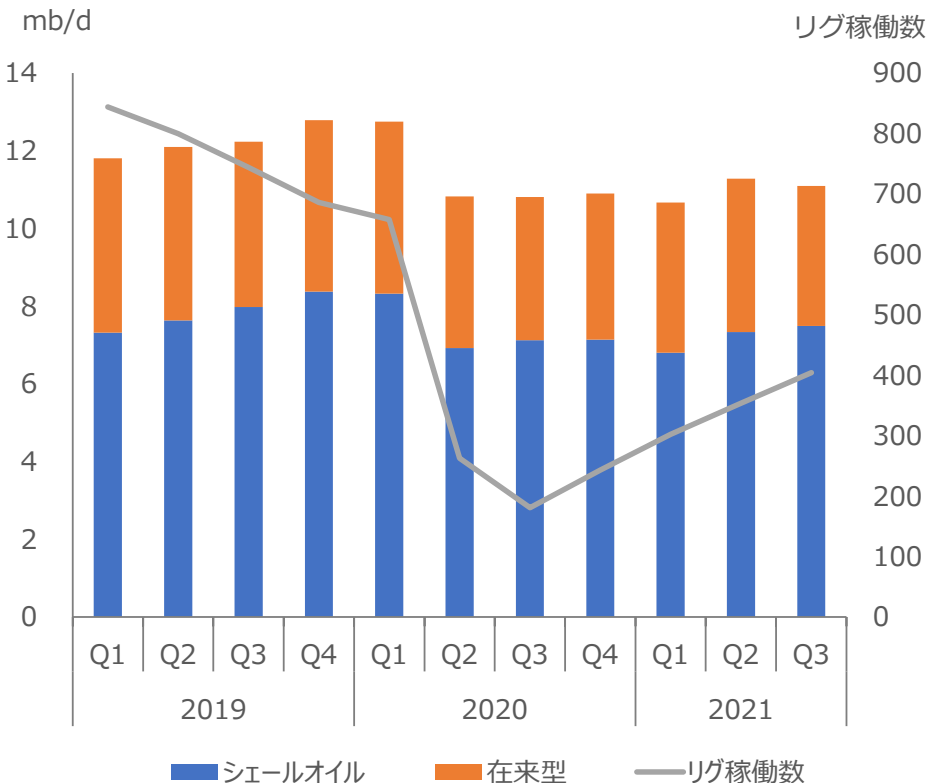
生産量増減（前年同期比）



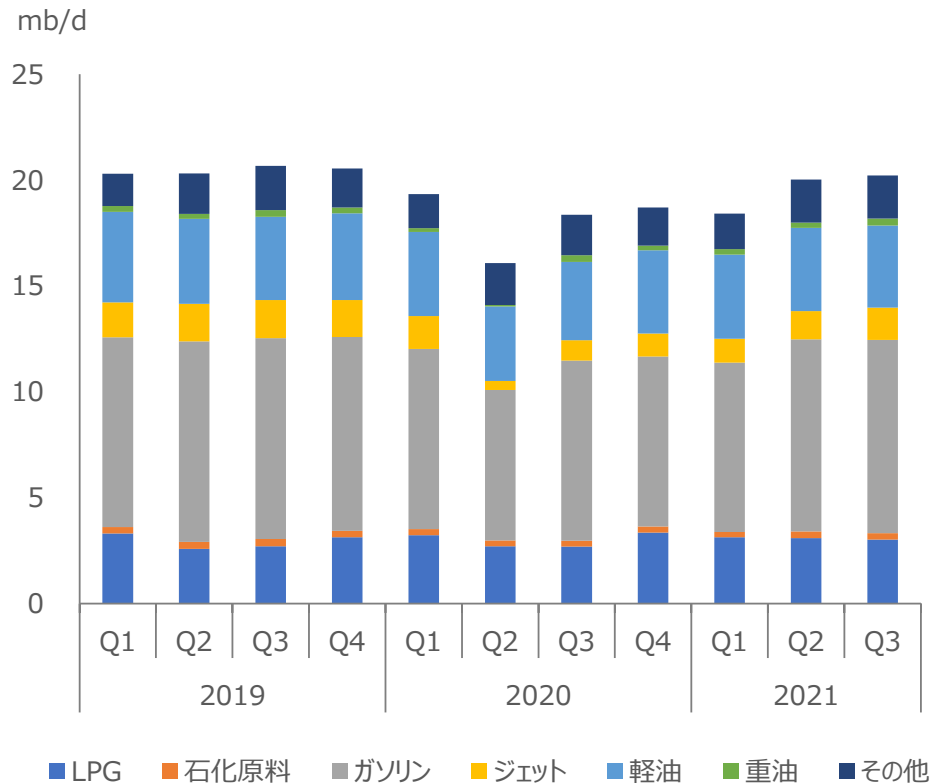
出所: IEA "Oil Market Report"、OPEC "Monthly Oil Market Report"

- OPECプラスの2021年第3四半期の生産量は4,940万b/d。
- 12月2日の会合で1月の増産維持を決定したが、COVID-19パンデミック悪化等、需要減少への懸念は強い。

生産量・リグ稼働数



製品別需要

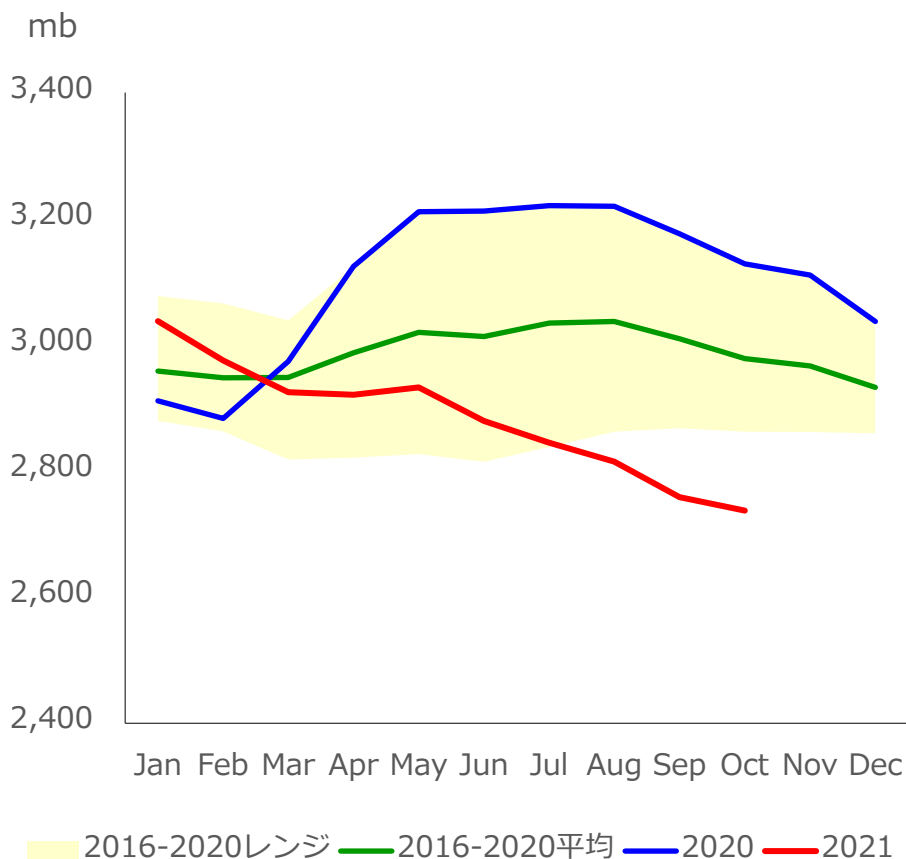


出所: EIA統計、Baker Hughes

- 2021年第3四半期生産量は前年同期と同水準の1,080万b/d。需要は同180万b/d (9.8%) 増の2,020万b/dと堅調。
- 価格上昇に伴って生産量はようやく回復基調に。
- 2022年も緩やかながらも生産量回復 (前年比約100万b/d増) は続き2019年水準を超えると想定。

在庫量と備蓄協調放出

OECD商業在庫

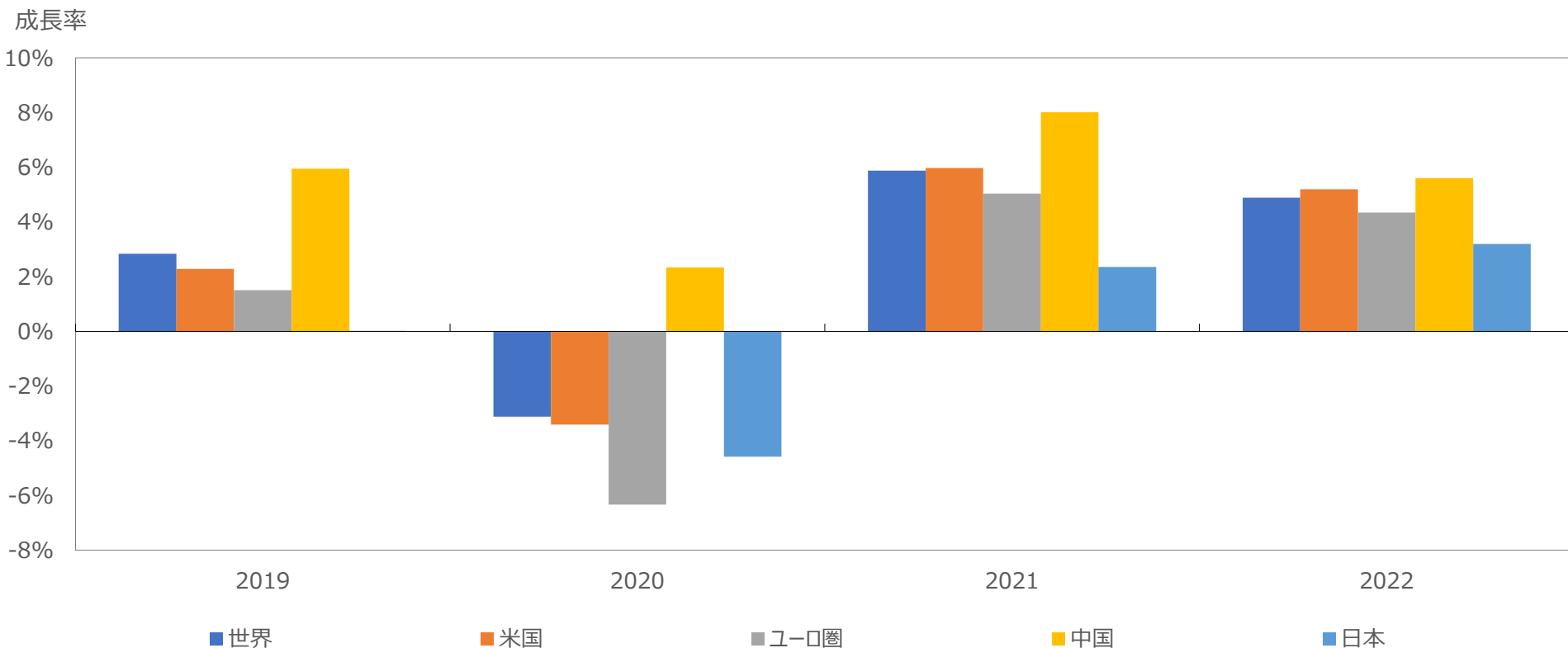


備蓄協調放出

放出国	放出量 (mb)
米国	50
日本	4.2
中国	7-15?
インド	5?
韓国	3.5?
英国	1.5?
合計	71.2-79.2?

出所: IEA “Oil Market Report”、White House、日本経済新聞

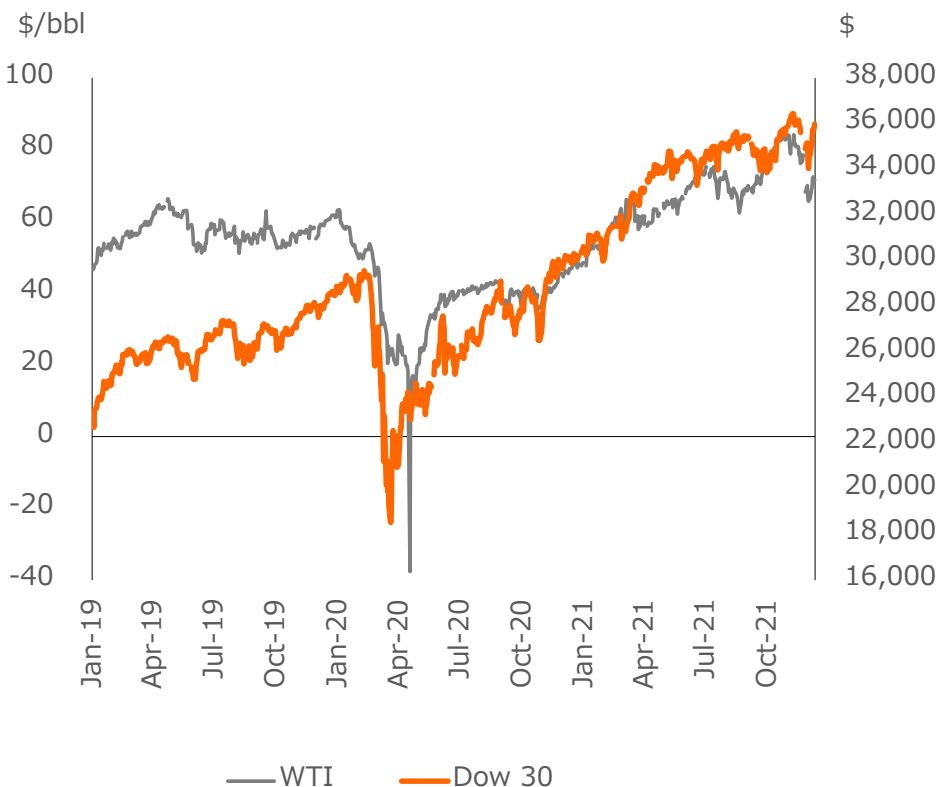
- OECD商業在庫は、9月では27億3,720万バレルと低水準で推移。
- 11月に米国主導で備蓄の協調放出を決定、米国は年内にも放出開始か。
- 価格抑制効果は現時点では限定的と見られる。



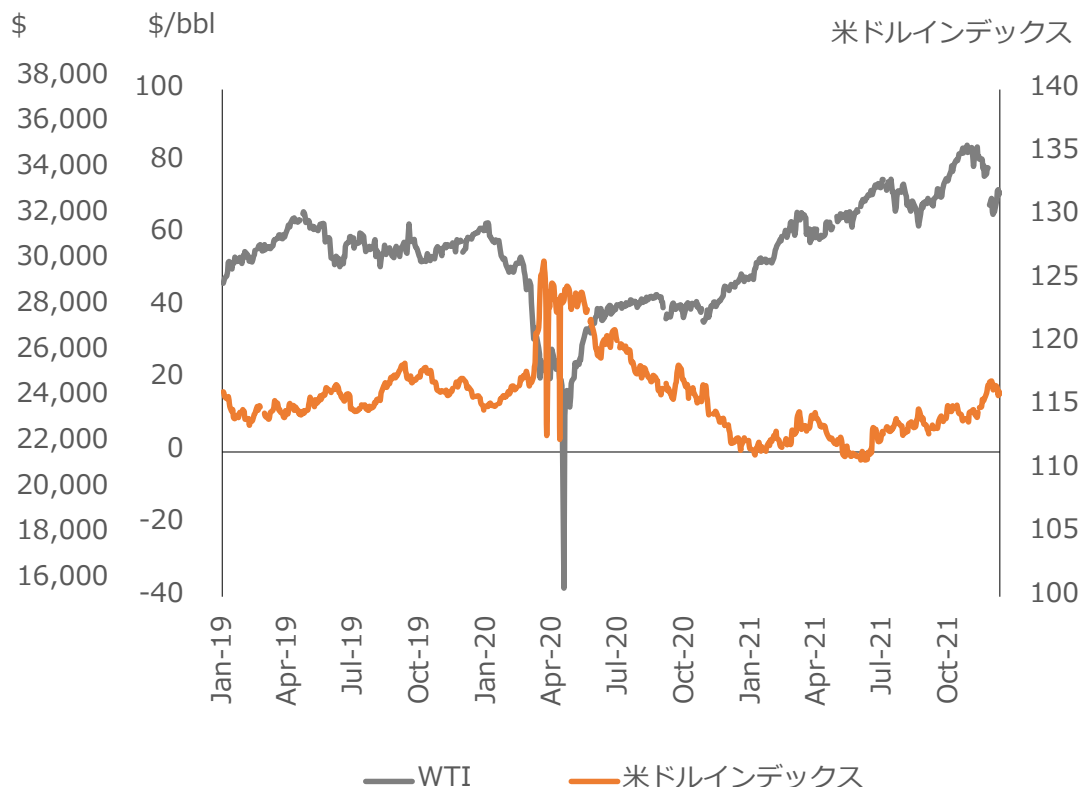
出所: IMF “World Economic Outlook”

- IMFは、10月、世界経済成長率を2021年+5.9%、2022年+4.9%と見通し。7月発表の見通しを、2021年については小幅に下方修正。
- オミクロン株の影響等によるパンデミック悪化はマクロ経済成長率の大きな下振れリスク。

油価と株価



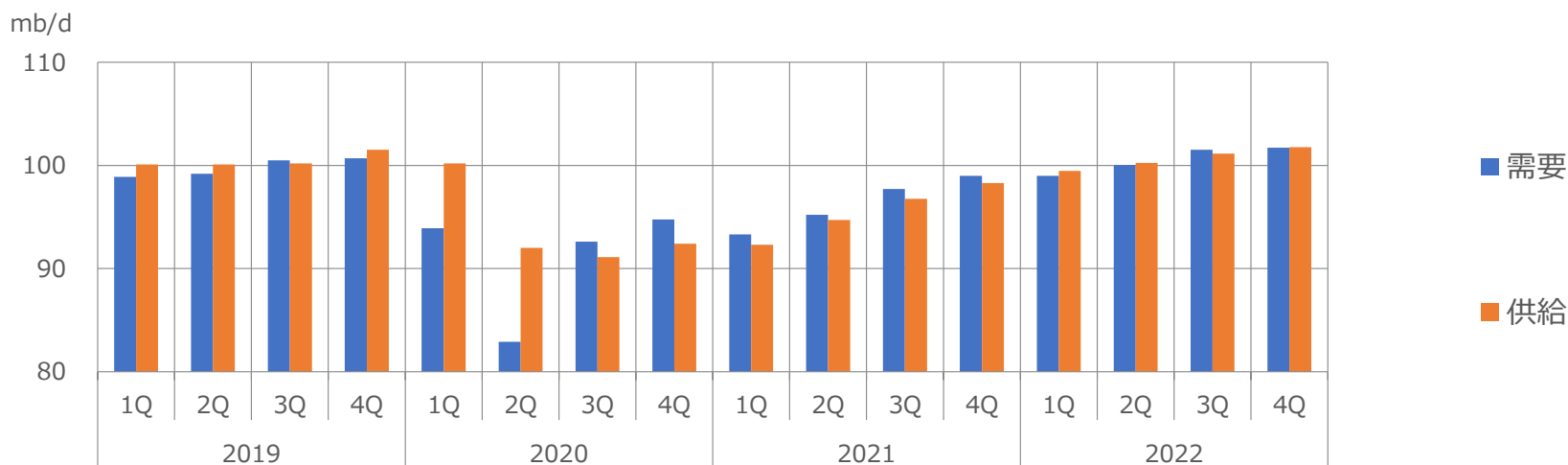
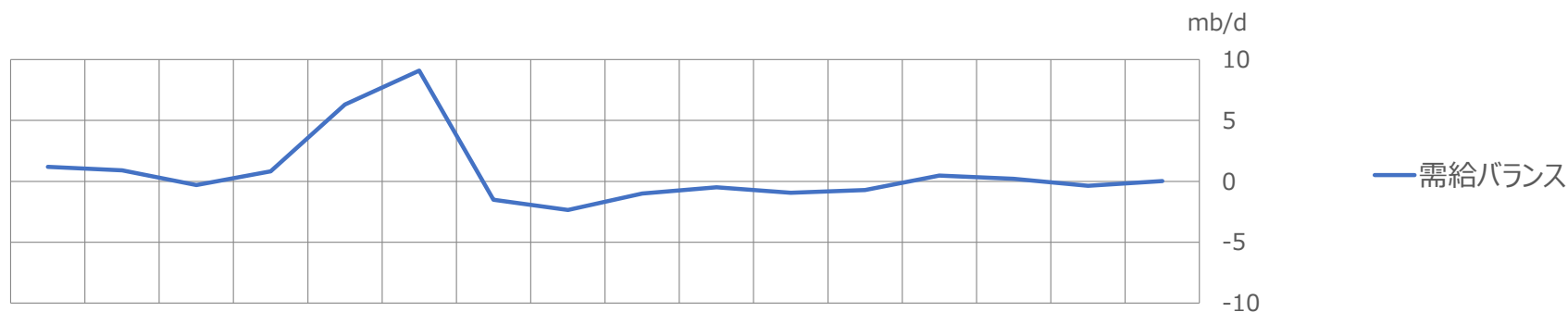
油価と為替



出所: FRB統計

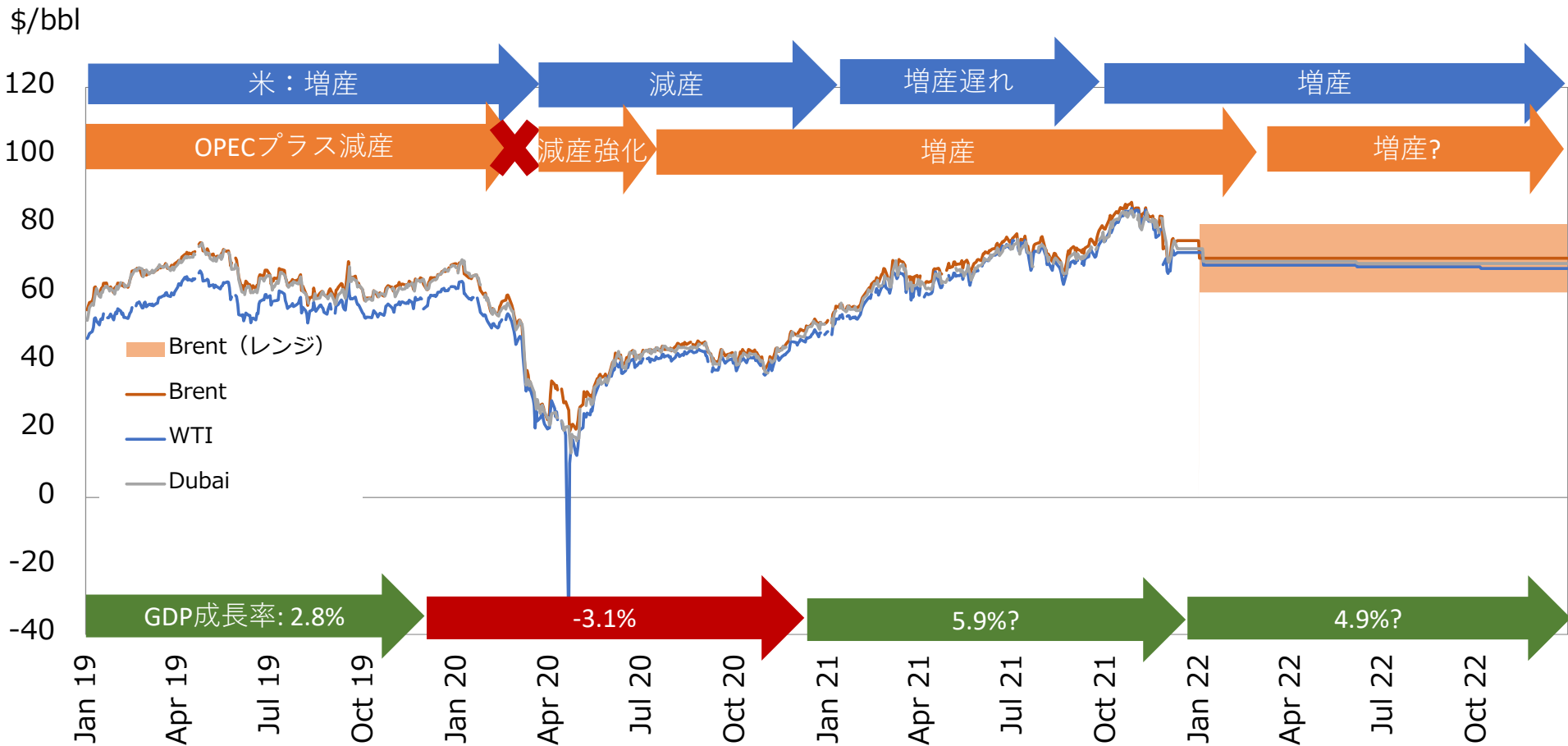
- このところのコロナ禍からの経済回復を背景とした油価の上昇局面では、米国株価と油価との連動が見られる。
- 2022年中ともいわれる米国利上げやパンデミック悪化は株価にも影響し、リスク資産からの資金流出も。

需給バランス見通し



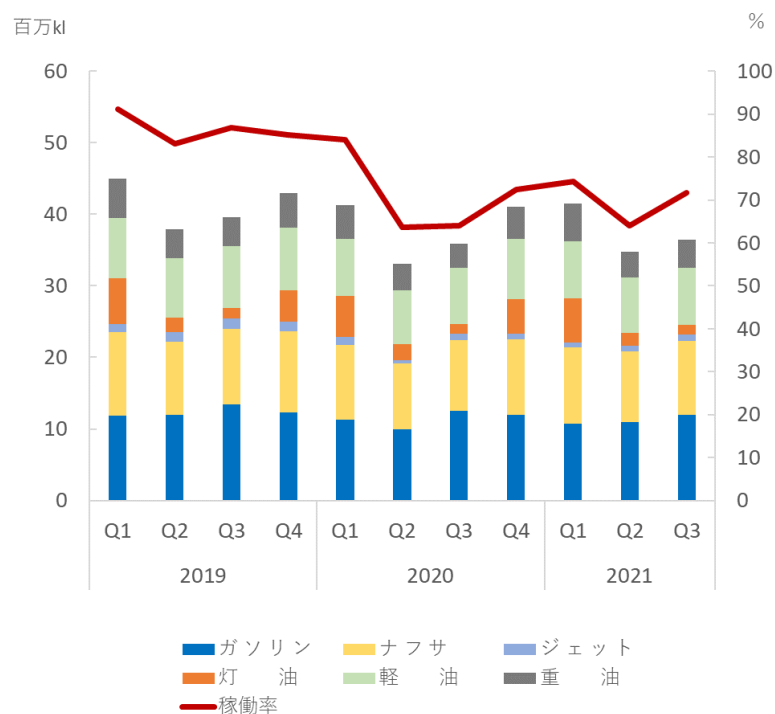
- パンデミックは極端には悪化せず、OPECプラスはペースを落としつつも増産を継続と想定。2022年の需要は2021年比430万b/d増の1億60万b/d、供給は同510万b/d増の1億70万b/dと、需給はほぼバランス。
- 但し、パンデミック悪化による需要減少、またOPECプラスの減産再開による供給減少は大きな不確実性。

原油価格見通し

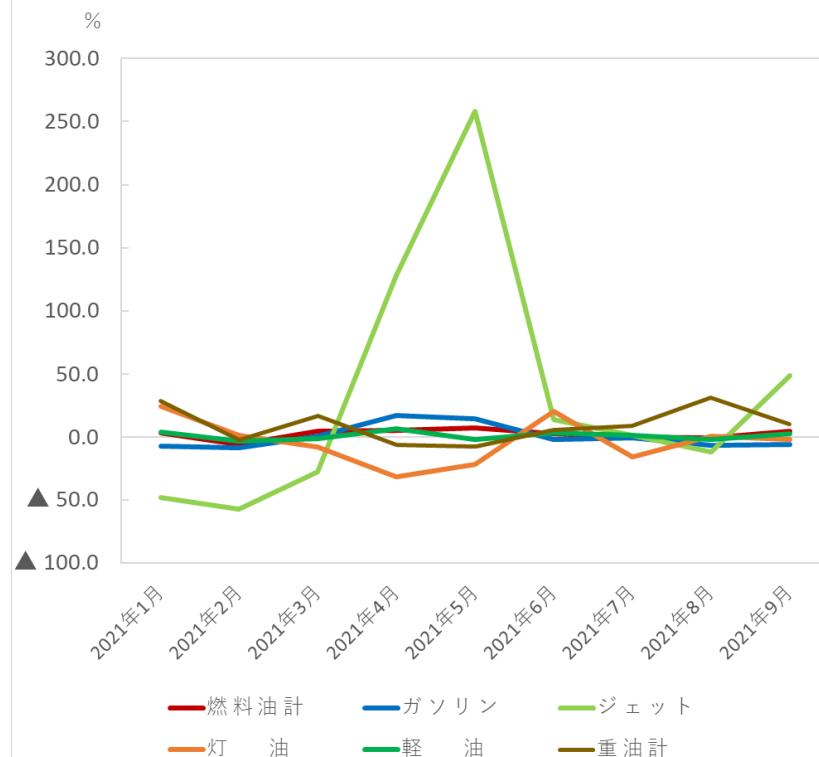


- 基準ケース：需給はほぼバランスして推移し価格は2022年のBrent平均価格は\$70と比較的安定して推移。
- 低価格ケース：パンデミック悪化等で供給過剰となり平均価格は\$60にまで低下。
- 高価格ケース：OPECプラス減産再開で需給が締まり平均価格は\$80に上昇。

燃料油販売量と精製設備稼働率



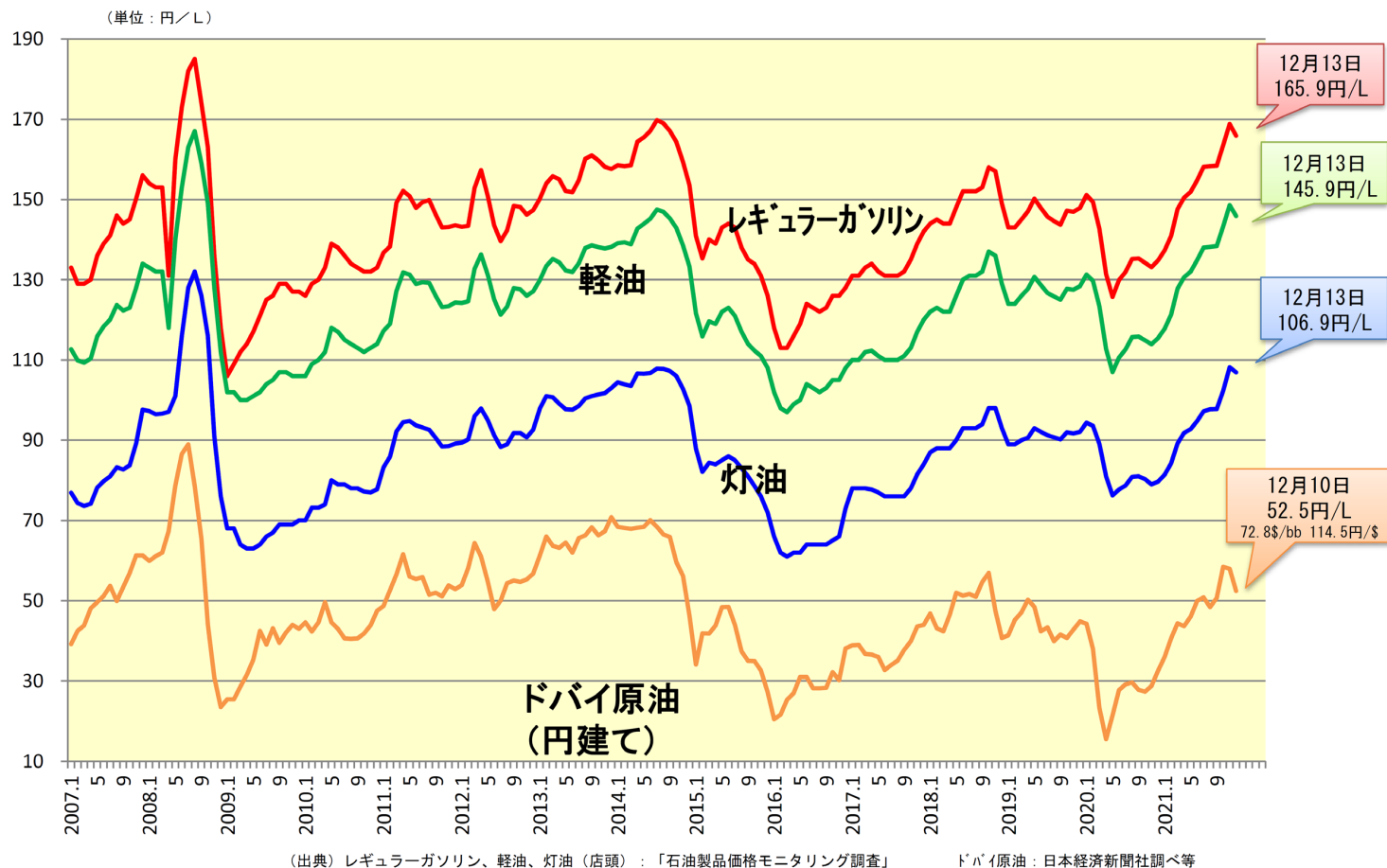
燃料油販売量増減 (前年同月比)



出所: 経済産業省

- 2021年第3四半期の石油（燃料油）内需は月平均1,214万kl（249万b/d）で前年同月比1.3%（16万kl）増 第2四半期需要1,159万kl（240万b/d）から4.5%増。
- 製油所稼働率は2021年第3四半期72%

国内市況



- 国内石油製品市況は原油調達コストに2~3週程度遅れつつ追随。
- 脱炭素化の動きが一段と加速した状況下、石油業界にとっては、事業基盤の転換と災害時や過疎地SSを含めた安定供給の維持の並行的対応が求められる。